

(ト) 手榴弾は雑糞に入れる

13. 重い兵器や弾薬箱には急造浮體をつけよ

重機關銃や歩兵砲等重い兵器や弾薬箱は水中に取り落しても沈まぬやうに急造の浮體を縛り著けると便利である。

止むを得ない時は浮體を付けて二、三人で綱で曳きながら水中を前進する場合もある。

五、上陸戦闘

1. 親船から小船に移るには

親船に積んだ小舟が水上に降されると繩梯子で移乗する、此の際は一列縦隊に並んで順序よく、間斷なく降る事に注意し小銃、輕機關銃は負革を以て肩に懸けるか或は負ひ又は負革を首にかけ救命胴衣か背囊の上端に横に負ず

上陸戦闘

二九

0330

のが便利な場合もある。軍刀は帶革の下に昔の武士のやうに差すとよい、彈藥箱や自動車は綱で舷側から小舟に下す、波が高くて移乗が難しい時は小銃、輕機關銃を一纏めとして天幕に包んでモッコ又は綱で艇内に下すこともある、繩梯子で降る時には中央の綱を確實に握り上體を梯に近づけ體重を兩腕に托するやうにし交互に速く桁を踏んで降りたら次の兵の邪魔にならぬやう所定の場所にあぐらかく、小舟は波の荒い時には随分揺れるが絶対に顧慮する事がないやうに出來て居る、どんなに波を被つても大丈夫だから姿勢を變へないで落付いて其の位置を守り操縦者の作業を妨害しないやうに注意しなければならぬ。指揮官は梯の上と下に補助者を置く事が必要である。

2. 小舟の上からの射撃

小舟には舳に近く重、輕機關銃の射撃設備をし、敵岸近くなつて敵火を受ける時には指揮官の命令で射撃しながら前進するのであるが舟が動く爲照準が困難であるから射手は目標附近にある森林、家屋、山頂等に補助目標を定

めて置き舟が浪の上に浮び上つた瞬間目標を見付けて撃つ著意が必要である、輕機で撃つ時には舟の動きに合わせて身體を屈伸し、擲彈筒を撃つ時には止板を舷側上に置き舟が水平になつた時に發射するのがよい、此の時は止板の下に土嚢を準備する、機關銃で射撃する時は齒弧及駐螺桿をはずし舟の動きに應じて身體を屈伸する。

歩兵砲で射撃する時は舟に砲を固定し適當な標準高を得るやうに必要な設備をし舟長は射方向と舟の前進方向とを一致させ砲手は舟が波の最高點に達した時に發射する。

3. 勇敢に跳び込め

敵火を冒しながら愈々岸に近づいて小隊長の「跳び込め」の命令があつたら勇猛果敢に跳び込む事が一番大切である、浪があつても少々深くても救命胴衣を着けて跳び込めば絶對安全である、たとへ脚がつかない深さでも浪が自然に岸に押し運んで呉れるものであるから安心して他人に後れを取らない

上陸戦闘

三一

0332

やう跳び込まねばならぬ、石花礁の海岸では竹柵を持つて足下を探りながら静かに歩く事が必要である、舟の右(左)側から跳び込む時には銃を右(左)手に持ち左(右)手で舟舷を握り左(右)足を足掛けに掛け右(左)足で舟舷を踏み切り膝を屈め重心を低くし銃を高く持つて脚を開き兩足同時に地に著くやうに跳込むのである。

輕機關銃を揚げるには一人の銃手が先づ跳び込み銃を受け取り分隊長に續行して射手となる。

機關銃を揚げる場合は二名の銃手が先づ舟の二側に跳び込み舟内の三人協同して銃を射撃位置より後方に引下げ前、後根をつけた後之を先の二人に渡す、受取つた二人は協同して搬ぶ、分隊長は右の動作を指導した後速かに跳び込み銃と共に上陸する、浪の高い時は四人搬送又は分解搬送するのがよい事がある。

4. 陸に上つたら勝だ

河童が陸に上つては役に立たぬが我々は陸に上れたらもう占めたものだ、戦は勝ちだ、對手は支那兵以下の弱蟲で戦車も飛行機もがたがたの寄せ集めである、勝つには決つてゐるが唯如何にして上手に勝つかの問題だけだ。上陸の場所に依つても違ふがアスファルトの自動車道が四通發達してゐる所もあるから成るべく速く敵地の自動車を分捕り敵のガソリンと敵の糧食と戦争する事や、小數の勇敢なものが夜を利用して深く敵の中に入り込む等敵を呑んでかかる氣持が大切である。

5. 救命胴衣は大切に

船の中では命の恩人であつた救命胴衣も上陸すると厄介物扱ひにされる、そんな薄情な事ではならぬ、指揮官の命令で海岸附近の發見し易い場所で満潮になつても流れない所に集めて後方部隊に渡す準備をしなければならぬ。上陸部隊が救命胴衣の紐をもぎ取つて行つた爲後の部隊に迷惑をかけた耶かしい例が尠くない。

上陸戦闘

三三

5カ

0334

6. 濡れた兵器を錆びない様に

海水に濡れた兵器は寸暇を見付けて直ちに手入をしなければならぬ、怠つてゐると銃や剣は錆付いて動かなくなり弾薬は不發になる事がある。

六、熱地の行軍

1. 水は生命の親

暑い地方の戦争で水の事を注意すると「判り切つた事だ」と馬鹿にして聞くであらうが、経験のない者には判らない程水は有難く、得難いものである。水は水筒の外別にビール瓶か、何かで餘分に持つて行く事が便利である。一日の水の量は暑さに依つて違ふが少くも一人十立、一馬六十立の標準で考へて置かねばならぬ、併し水は何處でも得られないから各人は良い水を得た時に補充をし節約して飲む事が大切である、渴を覺えても一度に澤山飲まず、

0335